

弟の智俊南科医師は、ソ連軍の捕虜となって平壤の解放軍診療所受持ちを命ぜられた。その当時、平壤での日本人死者は約二万人いた。間もなくソ連軍が北方に向かったあと、智俊さんは身を捨てて浮ぶ瀬もありとして苦肉の策、北朝鮮政府の命に従って千辛万苦三十日間の日数をかけて一人の落こ者も出さず、三八度線の苦境を脱出することができたのである。

弟、智俊氏の勇敢な決断と実行できたのは目に見えない神仏の加護に救われたと信子さんは言われるが、姉信子、弟智俊の姉弟相助けあう心と、親思い、血は水よりも濃しのごとく、三百二十人の引揚者みな同じであるとの、一視同仁の河崎家の家風に信子さんと智俊氏の人柄が今に生きている。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

終戦前後

千葉県 橋本 薫 一

明治五年（一八七二年）九月十三日、新橋横浜間で文明開化の象徴的存在として開業した鉄道は、明治の末になると国内官営、私鉄の総延長は九千キロに及んだ。

更に日清戦争のあと朝鮮半島の鉄道敷設権を得て、日露戦争前後に京仁線（京城―仁川）、京釜線（京城―釜山）、京義線（京城―新義州）などの幹線鉄道を建設し、明治三十九年に国有化し、韓国併合後は朝鮮総督府の管轄下におかれた。

大正末期には、東京から下関、釜山、京城經由で鴨緑江岸の新義州まで二千三百キロを二月半で結ぶようになった。そして、南滿州鉄道につながり、日本と大陸を結ぶ主要幹線を形作っていたのである。

父も大正初期、国鉄職員として釜山に渡った。朝鮮

鉄道と結ぶ釜山の棧橋までは鉄道省の管轄であった。

私の生まれ育ったところは古い釜山のほぼ中心部、西町という比較的静かな住宅街であった。前は橋倉外科病院、福田醸造酒場、田中病院と古い釜山を知る人なら記憶に残っている所であろう。

北に向かつて坂道を登り、大木のある電車の停留所（大庁町）を右手に見て左に折れると、すぐに釜山第一小学校があった。花崗岩の石の門は戦後五十年を経た今日も残る。当時（昭和十年ころ）では珍しい鉄筋コンクリート三階建て校舎が、羽を広げたようにそびえていた。

私は昭和十三年の卒業ではあるが、普通なら第〇回卒という言葉があるがこの学校にはない。昭和〇年度卒、大正〇年度卒という表現である。明治の初めに既にあった「民留民団学校」が、そのまま明治の学制によって第一小学校となつたらしく、いつを創立とすべきか判断に苦しんだ結果らしい。

既に非常時に突入していた学生時代の記憶は、上半身裸体での駆け足訓練であり、体操器具置場が軍の通

信所となったことぐらいであろうか。

昭和十三年、第一小学校を卒業し釜山公立中学校に入った。毎日、一時間近い通学路を五年間歩き続け、昭和十八年陸士に入学した。

私が陸士に合格したとき、わが家で大論争があったらしい。あとで姉から聞いた話であるが、祖父は長男の私の陸士入学には絶対反対であった。そのとき、断固とした態度で祖父を説得したのは母であり、「薫一の前で絶対そんなそぶりでも見せたら承知しない」という態度には迫力があつたと笑いながら話してくれた。当時では、陸軍航空士官学校の操縦訓練は内地では困難となり、昭和二十年五月、日本海を渡り北満の杏樹に移動した。そして、その満州で終戦前後を迎えることになる。

昭和二十年八月九日午前四時ごろ、突然非常呼集のラッパで起こされた。

「また訓練か……」と思いながら宿舎前に集合する。訓練のため、叩き起こされることは度々で別に驚きもしなかったが、多くの場合、完全武装とか体操服とか

行動に則した指示がだされるのであったが、その日に限り「服装はそのまま」という指示であった。『おかしいな』とは思ったが、とにかく集合した。

北満の朝は早い。明けに染まる空には雲一つなく、今日も絶好の飛行訓練日に思えた。集合を確認した週番士官が、緊張した面持ちで口を開いた。

「今朝未明、ソ連軍が国境線を突破して、侵入を開始した。いかなる事態にも対応できるように準備をしておくこと。週番候補生は命令受領に集合、その他の者は寢室で待機」、そしてちよつと間をおいて、「これは訓練ではない」と自分自身に言いかせるようにつぶやくと解散を命じた。その一言は思わず笑いをさそったが、あとはいつもの朝と同じような、静かな朝であった。

今にして思えば、その間、幹部は今後の対策について本部との連絡に追われていたことであろうが、『全面侵攻』を知らされなかつた我々は比較的のんびりしていた。朝食後も何の指示もなく、手持ち無沙汰の一人が作りかけの模型飛行機の翼をせっせと削っている

のが印象的であった。

やがて飛行機疎開の命令が出た。我々は、ユンゲマンというドイツ製の初級練習機と、九九式高等練習機を使って訓練していたが格納庫に入りきれず、エプロン（格納庫の前の広場）にあつた分を壕に移動せよというものであった。

午前九時ころであつたらうか、移動作業中にミグ戦闘機二機が飛来した。こちらは丸腰でどうしようもない。見ていると旋回して急降下に入った。移動中の飛行機をねらうのかと思つて見ていると、機軸は滑走路にそつている。

高度五十メートル、両翼の機関砲が火を吹いた。それは『ダダダッ』という勇壮なものではなく、『ポアン、ポアン』とのんびりしている。機銃ではなく、機関砲だからであろう。一連射行うと再度攻撃することもなく、そのまま飛び去つた。偵察目的であつたのである。

昼近くに移動も終わり、やがて全員移動するので荷物をまとめるようとの指示がある。歩兵と違い航空兵

はこのような準備には弱い。携帯用天幕を広げて荷物を積み重ね網で縛る。円筒形のそれらしい荷にはなつた。

高練班が午後九時、ユングマン班が深夜零時出発と決まったが問題は飛行機である。練習機だから二人しか乗れない。教官一人と候補生一人である。訓練班は候補生四、五人で編成されているので、各班ジャンケンで乗る者を決めることになった。私は負けて陸行組となったが、このジャンケンがその人の人生航路の大きな岐路になろうとは、だれもそのときには予想もしていなかった。

夕刻になると、学生以外の飛行場大隊の兵士たちはトラックで飛行場の西側に移動をはじめた。防衛線構築のためであろうか。我々先発隊はトラックで杏樹駅に向かった。

途中で東安高女の一行とすれちがう。勤労働員で来ていた彼女たちであった。口をきいたこともない彼女たちであったが、トラックの上から期せずして「頑張れよ」の声が上がった。彼女らも手を振ってそれに答

えた。

東安は国境線にある町であった。ソ連軍はいの一番に侵入したことであろう。彼女らの心境はいかがであらうと、小さくなって行く影を見つめて思った。

これまで時折夕方飛行場の片隅から、夕焼け小焼けの赤とんぼ……と彼女らがよく愛唱していた歌声も、もう聞くこともあるまい。その日も北満の空は、何事もなかったように、静かに、そして赤く燃えていた。

汽車は予定時間を大分遅れて杏樹駅に到着した。中は避難民で超満員である。内地の汽車とは違い車台の高い広軌の列車がホームでない所に停車している。人が乗るのが精一杯で荷を乗せることなど不可能である。「荷物は、そのままにして乗車」の指示でやっこの思いで列車によじ登る。

疲れ果てたような避難民の間に割って入る気にもならず連結器の上によりかかる。疲れが出たのか、いつの間にか寝入ったらしい。車輪の空回りの音で目がさめた。外は雨、超満員の車両で登り坂を登り切れない

らしい。

目が覚めると、列車は広い平原を朝日を浴びて轟進している。難路の坂道を突破したのである。短かつたような、長かつたような一日を思う。突然のソ連軍の侵入に追われて逃げている。しかし、負けるということなどはそのときには考えの中にもなかつた。

牡丹江に着いた。ホームも駅も避難民で超満員である。次の汽車が決まるまでホームでの待機となる。その間の私の仕事は駅で炊いてくれた飯を握り飯にすることであつた。

熱い飯を手の中で踊らせるようにして、何百という握り飯を作る。皆、腹をすかせていることである。当番に当たつた者は、水で手を冷やしながら作るのに余念がない。

作業が終わつてホツとしたとき、仲間の一人が奇妙な声をあげた。

「この手を見ろ」広げた手のひらは赤ん坊の手のように、ふつくらとして、そして白かつた。軽い火傷を起こしたのであろうが、それよりも手のきれいになつ

たことに驚いているのである。

私の手も、これが自分の手かと疑うほどのきれいだである。皆、うまそうにぱくついている今、その話はその場限りとい心伝心で決まつた。

突如、爆音が聞こえてきた。見上げると東の方から大編隊である。高度五百メートルぐらいでソ連の軽爆撃機五、六十機。整然と編隊を組みそれ以外には、わが方の戦闘機の姿はない。高射機関銃の発射音がわずかに聞こえるだけであつた。

ホームにいた避難民の多くはホームの下に降りて、停車中の汽車の下に避難した。ホームはがらんとして、残つたのは我々だけになつた。小銃に弾を込める。しかし敵機の軸線はあきらかに外れている。

やがて爆弾を投下し、地響きとともに黒煙が上がりはじめた。駅員に聞くと陸軍官舎街でしようという。昨日の今日である。まだ家族は残っていることであると思うと気が重くなつた。

声を出す人もなく、不思議な静寂が覆っているその時であつた。列車がガタンと動いた。悲鳴が上がる。

ふと、ホームの下を見るとそこには地獄絵巻が展開していた。

レールの上に両足をのせ伏せていたのであろう。両足をひきちぎられた男の真っ白な肉の塊が目にとび込んできた。手首もがれた人、体半分を車両の下にしてうめいている人。安全を求めて入ったはずの場所が、一瞬にして最も危険な場所に変ったのである。

線路に飛び降りて、目の前で両足を切断された男を引き出した。白色に近い顔、ぱくぱく口を動かしているが言葉にはならない。止血をと思うが、止血する場所がない。付け根から切断されている。

「衛生兵、衛生兵」とどなる。とんで来た衛生兵は、一目見るなり黙って首をふるとほかの負傷者に向かつて行った。男の口も動かなくなった。あのまっ白な肉が、いつの間にか血に汚れてどす黒くなっていた。男の顔にタオルをかけてホームに上った。

生さんがために避難していた人が死に、退避命令を無視してホームにいた自分がその人の最後を見届ける。ふと運命の皮肉のようなものを感じた。

そのとき、「候補生二人がやられた」という声がする。爆弾は近くには落ちていない。ホームから降りた者もない。どうして……。という疑問が浮かんだ。防空壕の入口で直撃をうけたという。

二人の名前を聞いて思った。二人ともクラスでもまじめな連中であつた。恐らく退避命令で、ホームの外れにある防空壕に向かつて走つたのであろう。それは結果的には爆弾に向かつて走つたことになる。

「集合」の号令がかかり、人員の点呼が行われた。二人以外に異状はなかつた。

先ほどの列車が動いた事件は、満人の駅員が機関手に動くよう合図したという。便衣（ゲリラ）らしいその男は憲兵に逮捕されたという。

問題の列車は避難民を満載して出発した。線路には死体そのままに放置されている。ちよつと前に起こつた地獄絵巻を忘れたように列車は去つてゆき、安全なるべき防空壕に向かつて友人は毛布をかけられて横たわっていた。どこまで皮肉にも運命は人間をもてあそぶのであろうか。

やがて無蓋車がホームに入ってきた。

「乗車」の号令がかかる。屋根なしの列車に乗るのは初めてである。そして、乗って驚いた。石炭運搬用らしく床は石炭の粉が一面であった。

初めは石炭を敬遠して立っていたが、一人座り二人座って、やがて全員石炭の上に座り込んだ。

列車の速度が上ると、石炭の粉も舞う。しかし、それが気にならないほど、疲れが襲ってきた。人間の動きとは関係なく、太陽は静かに西の地平線に沈みかけ、空は赤く染まりはじめていた。八月十日が暮れようとしていた。横になると石炭が気になる。座っているのと寝ているのではやはり違う。しかもあお向け以外に横にはなれない。粉が直接鼻を襲う。空は満天の星空であった。杏樹を出発して、まだ二十四時間も経っていないのに、長い旅を続けてきたような気がした。

予想してもいかなかった事態の展開であり、急テンポな変化であった。こんなとき、深刻に考えるべきだとも思ってしまったが、自分の力でどうなるものでもなかった。なるようになるさ……との結論に達したころ、い

つしか眠りに落ちていた。

やがて冷たさに目が覚めた。激しい雨であった。夏だというのに、寒さが身にしみてきた。着のみのままの脱出行である。雨合羽も杏樹の駅に置いてきた荷物の中にある。体をよせ合って、お互いに体温で寒さをやわらげる以外に方法はなかった。思い思いに身をよせ合った。レールの音を聞きながら、また深い眠りに落ちていった。

目が覚めたときには、夜は明けていた。気が付くと牡丹江で昼食の握り飯を食べてから、何も口にしていない。雑のうを開けて見ると中まで雨水がしみ込んでいる。カンパンは団子のようになっていた。皆も湿った団子のカンパンを口に入れていた。

やがて体の芯まで水に漬かっているような不快さが、次第に気になりだした。だれ言うともなく服を脱ぎ、シャツを脱ぎ、男だけの気楽さズボンも脱いで紐に通して乾かしはじめた。満艦飾をほどこした列車が、満州の大平原をひた走りに走った。

ふと気がついて雨にぬれた銃の手入れを始めた。い

つお世話になるかもしれない大切な銃である。皆の思
いも同じであつたようである。牡丹江で装填した弾も
ぬいて、隅々まで水気を切つた。いつでも使える。そ
のような安心感に満足した。

その日の夕刻、汽車はハルビンに着いた。次の汽車
まで駅前で休憩する。いつ汽車が決まるかわからない
という。そこで悪童四、五人で食糧調達に出かける相
談がまとまつた。

正式に申し出て許可されるはずはない。そこで当
直候補生と一時間という密約をかわし、軍刀を片手に
キタイスカヤに行くことにする。街は電灯もなく暗黒
の世界である。途中、開いている店は全くない。キタ
イスカヤも人通りのない死んだような街となつていた。
やつと一軒の店から明かりがもれていた。戸をたた
くと満人が顔を出した。「饅頭」をくれと言つたが手
を振つてないという。安心させるため、金を見せたが
困つたような顔をして、やはりないという。

食糧調達という大任(?)の手前、次第にいら立つ
てきた。相手もその気配を察したようで中に入れとい

う。中は喫茶店のようであつた。何かあるのかと聞く
と、アイスクリームならある、という。仕方ない。代
表して食つて帰ろうと衆議一決注文する。

そのアイスクリームの味は、恐らく一生忘れること
ができない。そして、その値段と共に……である。時
間もないので急いで食べ、さて支払いとなると一個五
円という。時が時だけにいわれるまま払つて外に出た。

しかし、帰りに考えた。どう考えても高い。当時の
我々の手当は月に四円五十銭であつた。相手の方が上
手かなと腹立たしくもなつてきた。

それは今、考えても高い。当時の我々と同格の防大
生の手当は月十万円をすこし上回つているとすると、
今の値段に直すと一個十二、三万円のアイスクリーム
を食べたことになる。一生一代のぜいたくであつた。

帰つて任務の果たせなかつたことを説明してあやま
つた。「それは高い。ボラれたな」、一人がそうつぶ
やいた言葉が印象的であつた。

深夜になつてやつと汽車が出るといふ。また無蓋車
である。しかも、残つた石炭の厚さは、座るとめり込

むほどである。せめて雨の降らないことを祈りながら、南下する汽車に身をまかせていた。

やっと雑談する雰囲気も出てきた。隣の友と故郷や家族の話をする。降るような星空がそのような気持ちを引き出してくれたのかもしれない。

八月十二日の昼過ぎ新京についた。初めての新京ではあったが、写真でよく見ていたので初めての気がしない。ここでも駅前には避難民でごったがえしていた。やっと弁当が配られた。空腹が満たされると、いろいろと考える。後発の部隊のこと、一緒に行動したという東安高女の皆さんのことなど。勃利までソ連軍が入り込んだため、急遽北上に切り替えたというが果たして無事にハルビンにたどりつけたのであろうか。

汽車が動き出したのは、夜もすっかり暮れてからであった。翌十三日の午後、やっと四平街に到着した。目的地は瀋陽飛行場で、駅から二時間余りの行程である。歩いているうちに空腹を思い出した。そういえば食事は昨日の昼食が最後であった。まる一昼夜、水と気力だけで頑張ってきたことになる。ただ黙々と行軍

を続けた。

飛行場にたどり着いたときは、さすがにホットした。入浴して九日以来の垢は落としたが、着替えるべき荷物も持っていなかった。食堂での食事もひさしぶりであったがなぜか食は進まない。私一人だけではなさそうであった。人間胃袋が完全に空になると小さくなるのであろうか。ただ静かに眠りたい一心であった。

八月十四日は、久しぶりにのんびりとした一日であった。戦況についての説明は全くない。断片的に飛行機で出発した仲間の不時着の話をするぐらいであった。

飛行場大隊の兵隊の話だと、すぐ先の鄭家屯^{ていかとん}までソ連の戦車が来ているという。しかし飛行場は普段と変わった様子も見られない。平靜そのものであった。情報のないことがかえって混乱を起こさないのであるのであろう。

八月十五日、朝の点呼のとき、正午から重大放送があるので全員で聞くとのこと。気持ちを引きしめてソ連軍と戦えとの訓示でもあるのだらうと思った。正午

近くになるとラジオが兵舎の前におかれた。我が家にあつたような小さい真空管ラジオである。ピーピー、ガアガアという雑音と通信隊の兵隊が一生懸命格闘している。

正午の時報に続き、君が代が流れてきた。思わず緊張した。雑音は一層はげしくなった。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ……」で始まった玉音放送は雑音に悩まされながらも、何とか聞きとることができた。終わってもだれ一人動こうとはしなかつた。しばらく沈黙が続いたがだれかが「謀略だ」と叫んだ。しかし、それだけであつた。

私はこの放送は本当だと思つた。その証拠に今、陸士の我々が着のみのまままで基地移動という名の退却を続けている。皆同じ思いのようであつた。黙々と兵舎に入ったとき、

「梅河口に移動、そこで集結する」という指示が伝えられた。動けば気も晴れる。昨日来た道を四平街駅に向けての行進が始まつた。「きれいごとを言つても

結局は戦に破れたのだ」と自分にいいかせた。十月には卒業、そして第一線配備という「特攻の夢」が崩れ去つたのである。

夜になってホームに入つて来たのは客車であつた。客車がこのように快適なものかと改めて認識した。しかし、座席に落ち着くと自分がじめじめに思えた。銃と弾はあり、軍力もある。間違つても生き恥をかきたくないと思つた。日本はどうなるのか。この満州にいる多くの民間人はどうなるのか。

ふと銃に弾を込めておこうと思つた。装弾の音に目を開けた隣の友は「馬鹿なことするなよ」と言うときま目を閉じた。彼も目を閉じても眠れずに、いろいろと思ひめぐらせていたのであろう。安全装置をかける銃を側に置いて目を閉じた。

駅で止まるたびに避難民が乗り込んで来た。子供連れの母親に席を譲る。お礼もいわずに放心したように座る母親に「敗戦国民」の姿を見たように思つた。少なくとも一週間前までの彼女は礼儀正しい日本の母親であつたにちがいない。

梅河口に着くと新しい指示が待っていた。

航空士官学校に帰還する

今度も無蓋車であった。夕刻、通化着。汽車は止まったままである。運転していた満人の機関手が逃げ出したという。

駅にいた将校の話では、関東軍司令部も来ているという。満州防衛の総本山もここまで逃げて来たのかと思う。汽車は動かなかつたが、ここでは食料だけはきちんと支給された。二日間を無為に過ごす。

十九日になり、二十日午前六時、関東軍の武装解除という話が伝わってきた。「我々の手で汽車を動かさう」と相談が始まった。次第に緊張が高まったころ、まもなく発車するという。頭にあるのは、航空士官学校に帰還する」という命令だけであった。

八月二十日午前六時、汽車は鴨緑江にかかった鉄橋を走っていた。「防毒面を捨てろ」との指示が通送される。当時では防毒面は軍事秘密であった。深い谷底めがけて投げ捨てる。帝国陸軍の誇りをすてるような思いにかられた。

鉄橋を渡り切ると満浦鎮^{まんほうちん}である。私にとっては生まれ故郷の地である。なんとなくホッとした感じになるのも不思議である。

沿線の農村には人影はなく、無人の境を汽車は南下する。その日の夕刻、平壤駅についた。その日は牡丹台の飛行場で一泊することになる。大同江の橋を渡った先にそれはある。街を通って行進したが、特に異常な人の動きは感じられなかった。所々に奇妙な旗が立っている。遠くから見ると、日の丸にも見えるが近付くと違う。大極旗であった。

飛行場には一機の飛行機もなかった。とにかく安眠したかった。

八月二十一日、朝食も食べ、携帯口糧を持って、昨日来た道を再び平壤駅へ向かった。駅は避難民でごったかえしている。どの汽車もはちきれんばかりの避難民をのせて南下して行く。見ていて思わず首を傾げる。南下する汽車は分かるが、北上する汽車も満員なのである。どう見ても日本人なのであるが。今も謎である。

のろろ運転の汽車の車窓に展開する風景は見慣れ

たなつかしい朝鮮の景色であった。一夜明けて生まれ故郷釜山に着いたのは昭和二十一年八月二十二日の午後であった。早速、棧橋で父と再会する。

療養中の姉も元気でいること、弟と妹は伯母と既に本籍地に疎開したことを聞き一安心する。父は家に電話したので、母がすぐ来るといった。出発までの時間が気になったが、父は「大丈夫」と保証した。もつとも父のタグボートが動かない限り、船は出港できないことを忘れていた。

母が来た。「情けないことになったね」とぼつりと一言。あとは言葉が続かない。携帯口糧を渡すと、「食料は心配ない」という。病気の姉にというと母は受け取った。「早く帰った方がいいよ」と言うと、後始末が終わる次第帰るといふ。すべてを捨てて体一つで……と言いかけてやめた。母の一生の結実がここ釜山にあるのである。

「乗船」の命令で母と別れた。

船は避難民で超満員である。我々はデッキに寝ることとした。生まれてから十八年間、わが町として生活

してきた釜山もこれで見納めかと思うと、やはり一抹の寂しさを感じた。出港のドラが響いた。

父の船長をしている第二鉄栄丸を求めて私は船尾の方に移った。シュナイダーペラ装備の独特の形の船尾から海水を泡立たせながら、本船を棧橋から引き離している。船尾に立つて私は手を振った。父もすぐ気付きブリッジから手を振っていた。

ロープが外され、本船のスクリューが回り始めた。船はゆっくりと前進しはじめていた。ふと気がつくと第二鉄栄丸は船尾すれすれに伴走してきた。船尾の日の丸が臉に焼きつくように思えた。「二十三日で日の丸はすべて降ろさねばならない」別れの前に父がポツンと言った一言が蘇ってきた。敗戦の実感であった。

あのときの日の丸は今も私の手元にある。父は、あの後も引き続き米軍に徴用されて船を動かしていたが、あの日を最後に二度と日の丸を掲げることはなかったという。昭和二十三年帰国するとき、父はその日の丸を持ち帰り私に渡した。

翌朝、船は博多港についた。岸壁で銃や短剣などの

武器が集められ束ねられた。よれよれの軍服に戦闘帽、雑のうにバンド、それが士官候補生が母校に帰る姿であった。

博多駅で待っていたのは、またしても無蓋車であった。

広島は日暮れ前であったが、よく見えた。よく見えずはずである。駅からは建物もなく、宇品港の先にある島が目の前に見えた。想像を絶するような破壊である。「城がない」、広島幼年学校出身の一人が悲鳴にも似た叫びをあげた。

汽車は米軍の指示で北陸線を回り、信越線を通って大宮に着いた。それから列車を乗り継いで、埼玉県豊岡にある学校に帰りついた。

学校はがらんとして、我々が最後のようであった。準備された服に着替え、校長閣下に帰校の報告をして、すべてが終わったという思いにかられた。米一升、毛布一枚と汽車の乗車証、それが復員業務のしめくくりであった。

東京駅から窓ガラスもない客車に乗り込み、翌日の

夕刻、柳井駅についた。歩いて室津半島を下る。さすがに、そこには戦争の痕跡はなかった。

本籍地の島は、引揚者、疎開者で三倍以上にふくれ上がっていた。伯母、妹、弟に迎えられ、三つ年上の従兄の戦死を初めて知った。母からの連絡はこちらにも届いていない。焦燥の日が続いた。

母からの連絡が届いたのは九月十日過ぎであった。漁船をチャーターして帰るといふ。九月十六日の昼すぎ、もう姿が見えてよいころだと妹と裏山に登って西の方を見た。それらしい船はなかった。夕方から雲行きがおかしくなり、やがて激しい風雨となった。枕崎台風の来襲であった。

九月十七日午前三時ごろ、表の戸が激しくたたかれた。「浜田屋の船が難破したぞ」、大声は次に移った。浜田屋の船、それは母のチャーターした漁船である。

飛び起きて海岸を走る。前を行く人影を追うように島のはずれに向かつてひた走った。海岸線のカーブした先に船腹を見せた船が夜目にも浮かんで見える。先に到着した伯父が「中に人がいる」と船腹をたたいた

棒をふって叫んでいる。島の若者が斧を取りに走った。

船底に穴をあけ救出作業がはじまった。従姉と子供二人、同乗の近所の老人二人が救出された。姉はベッドの中でこと切れていた。病身の身では体力がもたなかったであろう。船長と母の姿がなかった。「姉さん、外を見てくると出たまま」、従姉が言葉をつまらせて言った。

姉の葬儀の慌ただし中にも、母がひょっこり帰って来るのではないかと何度も海岸に出て見た。海は静かで、いつもの瀬戸内海に返っていた。

その後、一週間して母の遺体が上がったという知らせが役場からあった。場所は笠戸島、ちょうど真西に当たる最初の島である。伯父と共に現地にかけつける。個数二戸の小さな村の海岸であった。

伯父は「お前はここでまっておれ」と強い口調で命じて、海岸の端に置いてある棺の方に向かった。私は海岸の中央部に穴掘りを手伝う。火葬のための準備である。棺に見合う穴を掘り、下と両端に薪をつめ、同行した市役所員と伯父が運んできた棺を乗せた。更に

薪で棺を覆い生木をかぶせた。

「間違いない。お前は見ない方がよい」厳しい態度の伯父は、私に火を付けるように促した。油をかけた薪はみるみる燃え上がり棺をつつんだ。一軒の家の世話になり、その縁先で炎を見つめていた。せっかくの好意の夕食も断り一晩中、見守ろうと決心していた。「お前に見せなかったのは……」背後で伯父がぼつんといった。荒波と岩で片手と片足がなかったというそれは私も想像はしていた。漁師で一生を過ごした伯父の生活の体験がその母の姿から私を遠避けたのであろう。むしろ釜山での別れを懐しいものとして残してくれた伯父に感謝した。

闇の浜辺で燃えさかる炎。それは過去との訣別を私に決心させてくれた。母の葬儀が終わったら郷里を出ようと思った。そして、完全に裸となった自分の第一歩を踏み出したいと決心した。弟妹は当分は伯母に託し、やがては引き取ろうと母にそして自分に誓った。昭和二十年九月二十七日、満二十歳を迎えたばかりの夏であった。

【執筆者の横顔】

橋本薫一氏は（父は釜山の朝鮮鉄道に勤務）、大正十四年に誕生し、釜山で育つ。昭和十八年に釜山中学を卒業。通学に毎日片道一時間を要するところを五年間歩き続けた健脚ぶりは堅固な精神力を持つて貫いた薫一氏であればこそ、若人の憧れだった陸士に入学できたのである。陸軍航空士官学校で学び昭和二十年五月、日本海を渡り北満の杏樹に移動した。八月九日、非常呼集で営庭に整列したとき、週番司官からソ連軍が国境線を突破して侵入を開始したと報ぜられた。

もう既に杏樹駅には避難民が殺到し始めた中に薫一氏は隊員も乗車して東安へ、牡丹江へハルビンへ八月十二日新京、四平街、瀋陽に南下していたが、一昼夜は水と気力だけの日もあり、屈せず生き延びた。

八月十五日、重大放送に接した。先に君が代が流れたので思わず緊張する。玉音放送を聞きだれ一人動こうとしない沈黙が続いた。だれかが「謀略だ」と叫ぶものがいた。薫一氏はこの放送は本当だと思った。そのとき、梅河口に集結の指示が伝えてきた。昨日来た

道を四平街に向けての行動である。ついに戦いは破れたのである。十月に卒業し第一線配備という特攻の夢が崩れ去ったのである。

夜、客車に落ち着くと自分がしみじみとみじめに思えた。銃には弾がある。軍刀もある。生きて恥をかきたくないと思うとともに、日本はどうなるのか。この満州にいる多くの日本人はどうなるのか。ふと何の気なしに装弾をして銃に弾をこめたところ、隣の友は「馬鹿なことをするな」とどなった。

梅河口に着くや航空士官学校に帰還するとこの指示をうける。八月二十日に満州防衛総本部の関東軍の武装解除を聞く。列車は鴨緑江を薫一氏が住んだ満浦鎮を経て平壤にそして生まれ故郷の釜山につく。早速両親を訪ね無事を喜びあった。

伯母は弟と妹の三人で本籍地に帰って両親と姉だけ残っている。薫一氏は乗船命令が出て父母と別れた。

父は米軍に徴用された船を動かしていたが、なるべく早く引き揚げるよう言ったがウンと頷ずいていた。生まれて十八年間、わが町として生活した釜山との別れ

は一抹の寂しさを感じた。博多港に上陸、米軍の指示通り埼玉県豊岡にある学校に入り校長に帰校報告、米一升毛布一枚乗車証、これが復員業務のしめくりであった。

九月十七日姉の病死に遭い、母も無念にも昇天、母の葬儀を終わつたのち弟妹を伯母に託し、昭和二十年九月二十一日満二十歳を迎えた薫一氏は志を立てて郷里を離れることを決心したのである。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

平和よ永遠に

山口県 檜 垣 正 人

はじめに

私は昭和四年四月六日、朝鮮慶尚南道釜山府土城町老丁目拾壹番地ノ式において、父中道熊三・母マツの二男として出生。終戦により内地に引き揚げるま

での十六年七カ月間を生地で過ごしてきた。その私もついに本年四月をもつて高齢者の仲間入りを果たす年になった。

父の決断

父は、岸・佐藤の兄弟宰相を輩出した山口県熊毛郡田布施町の一隅で、明治三十一年小作農家の長男としてこの世に生を受けた。

「貧乏人の子沢山」なるが故に、筆舌に尽くし難い数々の労苦を重ねながらもたくましい防長つ子として成長。農繁期ともなればその手伝いで小学校も欠席がち、早朝からの薪拾いに続く町中での野菜売りなど、夕餉の一家団樂の折に往時を偲びながら、父は少年期の生さざまを私たちによく話してくれたものであった。十八歳にして早くも両親を失つた父は、釜山で商売を営む叔父を頼つて単身渡鮮。そこで商売の手ほどきを受けながら、独り立ちの日を夢見て懸命に叔父の手助けをしていた。

徴兵検査で日本男子の本懐である、「甲種合格」の栄に浴した父は、勇躍、山口歩兵四十二連隊に入隊。